

発表者名：眞鍋雄太 1) 2)、松永慎史 1)、金子 宏 1)、入山 正 1)、田島光晴 1)、
西村真由子 1)、浅野真由美 1)、松本涼子 1)、二村良博 1)

所 属： 1)藤田保健衛生大学中部国際空港診療所
2)藤田保健衛生大学病院 一般内科

抄録タイトル：中部国際空港利用旅客にみる感染性腸炎の実態

【はじめに】

高速移動が可能となり、ヒトとモノとの往来に物理的制限が殆どなくなった今日、我々は外国旅行を気軽に楽しむことが出来るようになった。こうした利便性の向上は、その土地固有の病原体に暴露される危険性や、我が国の衛生概念からは考えもしない感染症に罹患するリスクも高めることでもある。旅行者の多くは、防疫の観点から生水や非加熱食材の摂取は避けようと心掛けているが、それでもなお旅行先で感染症に罹患し、折角の旅行を嫌な思い出に変えざるを得ないケースが存在することも事実である。

【目的・方法】

我々の診療所は、旅客の楽しい旅のお手伝いを目的に 2005 年 2 月 17 日の中部国際空港開港と同時に開院した。最も多い疾患は急性咽頭炎を始めとした上気道の感染症であるが、激しい嘔吐と下痢を主訴に、降機後直ちに検疫所から当診療所へと搬送されてくる旅客もしばしば目にする。その多くは旅行中それなりに衛生面への配慮をした行動をとっていたにも関わらず、である。我々としては、より一層の旅行時の衛生・感染予防に関する啓蒙が旅客の旅の安全に寄与するものと考え、旅客の感染性胃腸炎の実態を調査研究することとした。方法は、①旅客、②感染性胃腸炎の診断、③消化管細菌培養施行、④細菌培養結果が保存されている 34 名を対象に、渡航先別にどのような病原細菌の感染が多いのか、想定される感染経路・感染源の別を後方視的に調査した。

【結果・考察】

感染性胃腸炎と診断された旅客は、タイ、インドネシア、カンボジアといった東南アジア圏からの帰国者に多く (47%)、起因菌の内訳は腸炎ビブリオ 16 名、病原性大腸菌 11 名、サルモネラ属菌 5 名、キャンピロバクター 3 名の順となった (1 例は重複感染)。また想定され得る感染源として、海産物及びその他の生食と氷を含めた生水の摂取とが全体の半数、56%を占めていた。本邦における消化管感染症 (食中毒) の 2 大起因菌は腸炎ビブリオとサルモネラ属菌であるが、これは刺身や生食を好む日本の食文化と密接に関係しているとされる。今回の結果でも、感染性胃腸炎全体の 62%を両菌群が占め、生食が原因と考えられる症例が全体の 41%を占めた訳だが、両者は 1 対 1 の関係にあった。結果をみるに、旅先では、安易な非加熱食品の摂取を慎むことこそ、当たり前のことではあるが旅を安全かつ楽しいものとする第一歩と言えるのではないだろうか。